

ヒマラヤの孤児マヤ

■ 秘境ネパールをゆく日本人医師

■ 岩村史子・著 — 日本キリスト教海外医療協会常務理事 佐藤 智・解説



世界の子どもノンフィクション
10
NF



<著者> いわむら 史子 岩村史子

鳥取県に生まれる。県立米子高女、
東京都立社会事業学校卒業。1962年
以来、夫君昇氏と共にネパール国タ
ンセン市に赴任し、結核乳幼児の養
護につとめる。著書に「わが愛はヒ
マラヤの子に」のほか「山の上にある
病院」「ネパール通信」(共著)がある。
(なお、この本の印税は全額ネパールの
少年少女のBCG基金にあてられます)

N.D.C. 289 偕成社 1970 186p. 23cm.

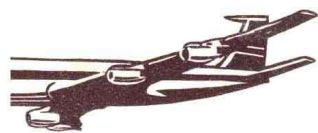
世界の ノンフィクション<10> ヒマラヤの孤児マヤ
こども

発行 昭和46年 7
著者 岩村史子
発行者 今村 広
本文印刷 新興印刷製本株式会社
多色印刷 小宮山印刷株式会社
製本 文勇堂製本工業株式会社
定価 460円

発行所 株式会社 偕成社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5

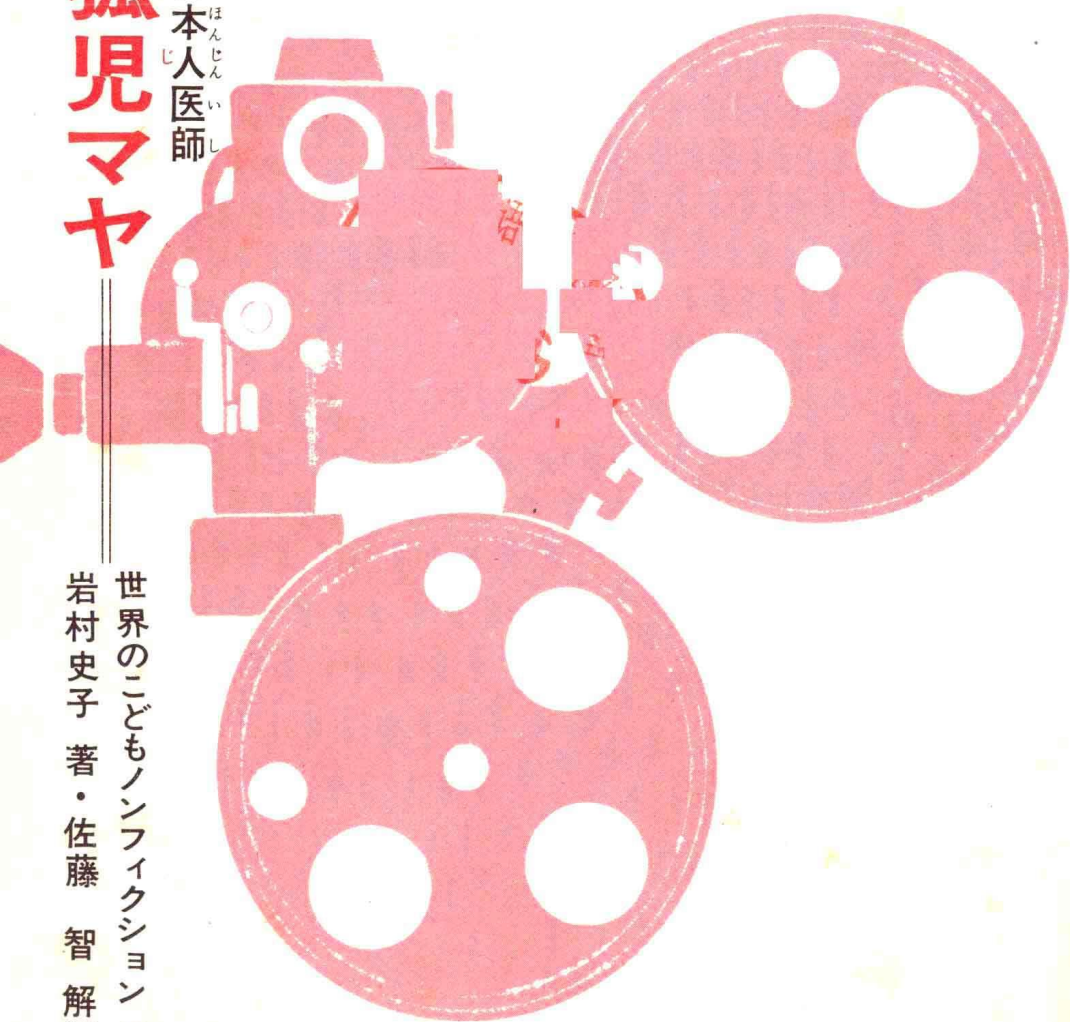
振替 東京1352番
電話東京(260)3221(代)



ヒマラヤの孤児マヤ

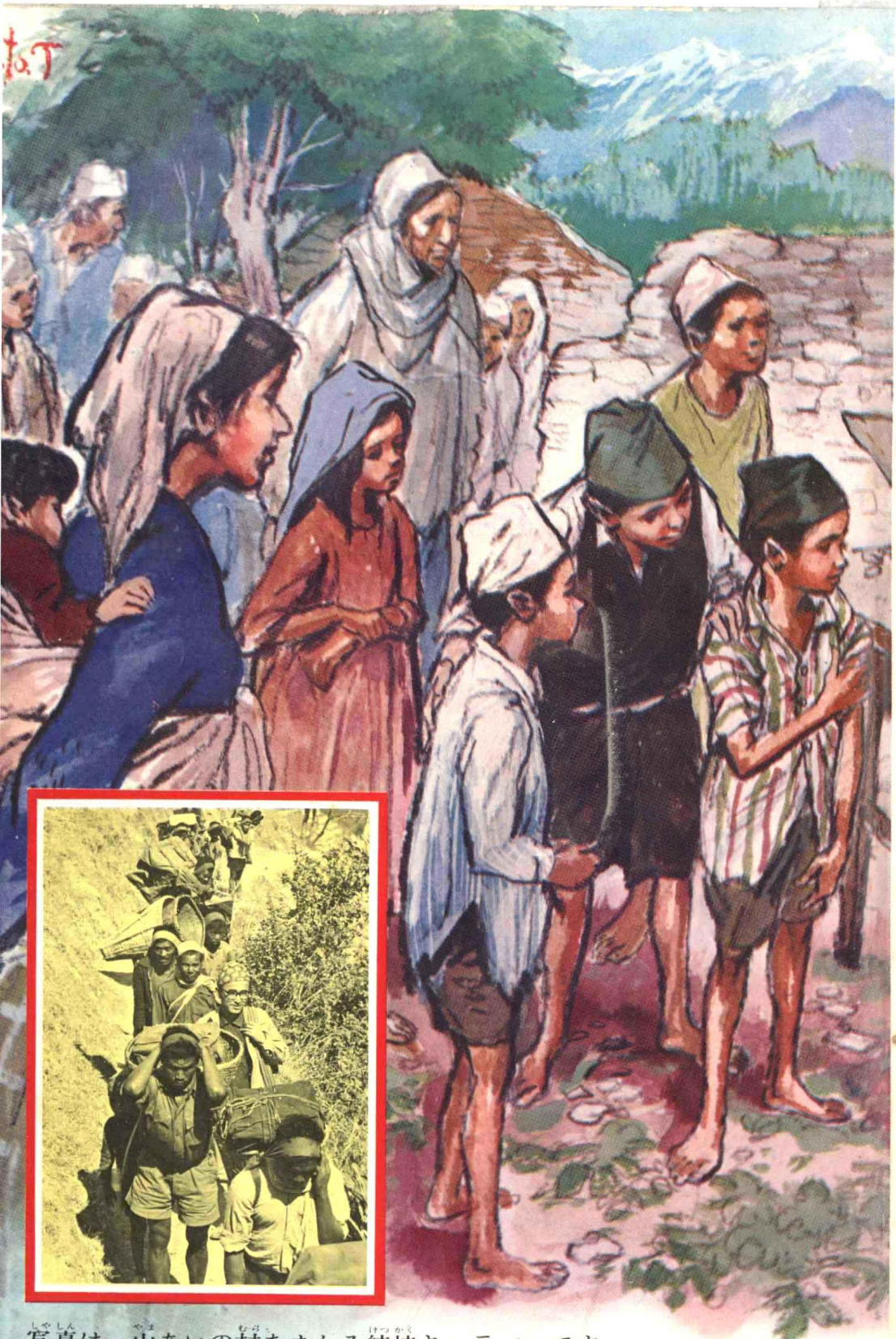
■ 秘境ネパールをゆく日本人医師

世界のこどもノンフィクション 10
岩村史子 著・佐藤 智 解説

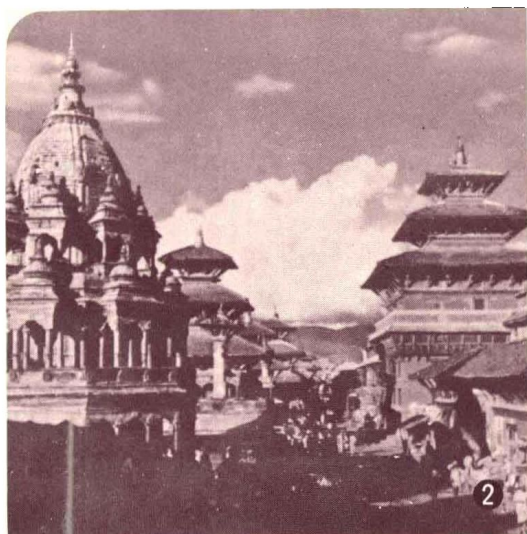




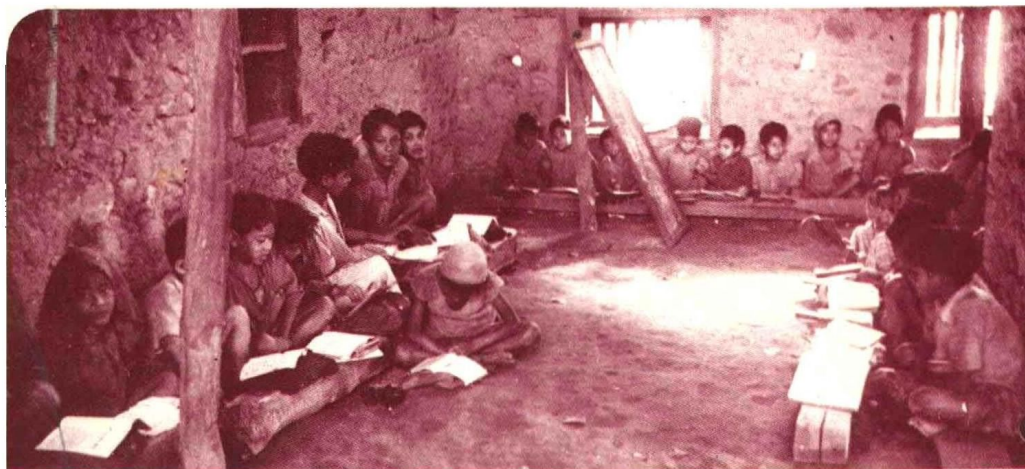
昇はあつまった子どもたちに、ツベルクリンの注射をしました。



写真は、山あいの村をまわる結核キャラバンです。



- ①小学校でネパール語をならっているマヤ。②主都カトマンズにある、かわったかたちのお寺。③げんきによくたべるハルカの食事。④いなかの小学校では、みんなすわって勉強しています。



● はじめに

岩村史子

日本の小学生のみなさん、こんにちは。

わたしはいま、とおいヒマラヤのふもとの小さな国、ネパールでくらしています。この国の人たちの病気の治療と、キリスト教をひろめるために、夫とやってきたのです。

ネパールにも、子どもたちがいっぱいいます。みんな、あかるく元気です。わたしの家にも、みなさんとおなじくらいか、もうすこし小さい、マヤというネパール生まれの女の子がいます。小さなあかちゃんのところから、わたしたちがだいじにそだてた子です。

でも、マヤはどうして、ほんとうのおとうさん、おかあさんにそだててもらえなかったのでしょうか。

どうして、外国人のわたしにそだてられたのでしょうか？

マヤは、どんな子でしょう？　そして、マヤの生まれたネパールはどんな国でしょう？　わたしは、日本のみなさんに、そのおはなしがしたいのです。よんでみてください。





● も く じ

ただいま！ マヤなんです…………… 10

おかあさん生きていて…………… 10

はじめてみた世界…………… 13

ネパールとのかけ橋…………… 18

小さいいのちを…………… 24

この子がほしいです…………… 24

ヒマラヤの子守りうた…………… 33

きょうだいだから…………… 41

こんにちは、ネパール…………… 46

すばらしいゆめを追って…………… 46

へいきん寿命三十七才の国…………… 53

ネパール語のしけん…………… 61



病氣^{びようき}にうちかったマヤ……………68

二十日^{はつか}もあるいてくる病人^{びようじん}……………68

愛^{あい}の女神^{めがみ}、マヤIIデビー……………75

ドクターになりたい……………83

結核^{けっかく}キャラバンはいく……………95

山^{やま}あいの村^{むら}をたずねて……………95

みんなで生^いきるためです……………100

コレラ・せきり・天然痘^{てんねんとう}……………105

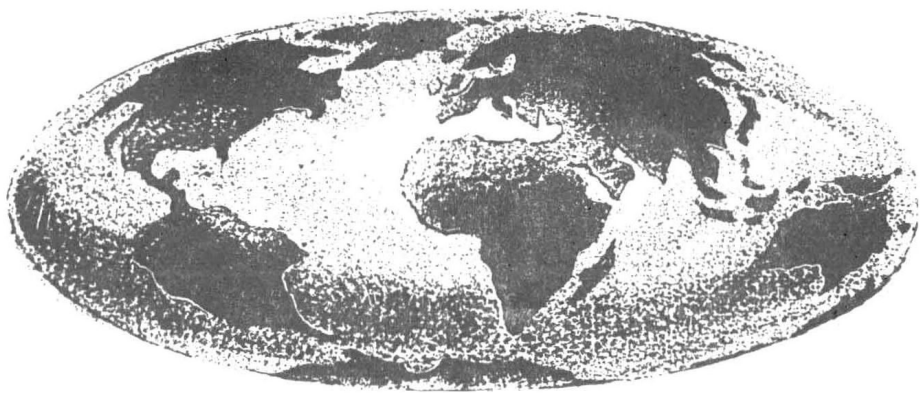
いのちの火^ひはもえあがる……………110

マヤのおとうさんがきた……………110

おしでなければいいが……………121

マヤがあるいた、はなした……………125

孤兒^{こじ}になったマヤ……………134



おかあちゃん、ユキだ		134
アマもバブも死んでしまった		140
親はわたしたちだけに		148
すばらしい星空の土地		156
なつかしのネパール		156
この人よそのおかあさんだわ		164
バブラムがかえってきた		171
わたしたちの家族会議		176
あ		182
と		182
が		182
き		182
みんなの力で(解説)		184
佐藤		184
智		184

ヒマラヤの孤児マヤ

■岩村史子 著

■佐藤 智 解説

世界のこどもノンフィクション 〈10〉



ただいま！ マヤなんです



おかあさん生きていて



一九六三年（昭和三十八年）十二月十四日のことです。わたしたちは、ネパールとインドの国境^{こつぎよう}ちかくを、人力車^{じんりきしや}で走^{はし}っていました。

わたしたちの勤務^{きんむ}した、タンセンの病院^{びやういん}を出発^{しゅつぱつ}したのは、きのうのことでした。

これから、インドの国境^{こつぎよう}をこえ、ノータンワというところへでて、そこからインド鉄道^{てつどう}でカルカッタへむかうのです。

日^ひぐれがせまってきました。国境^{こつぎよう}はすばらしい夕^ゆやけでした。

大きなまっかな太陽^{たいよう}が、西^{にし}のほうの山脈^{さんみやく}に、ゆっくりとしずんでいきます。

「アーゴー（火^ひ）！」

ネパール

中華人民共和国

チベット

ネ

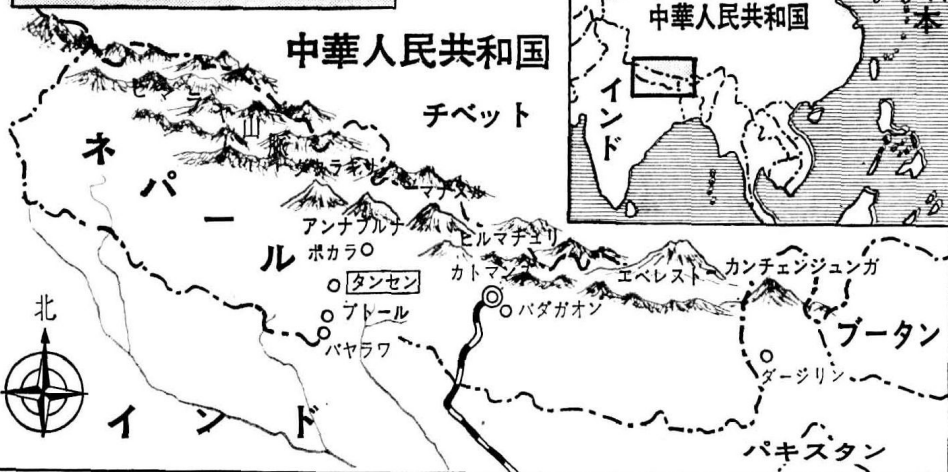
パ

ル

イ

ン

ド



だいていたマヤが、とつぜん、夕やけをゆびさしながらさげびました。

ふりかえると、北のほうは、ネパールです。あの山脈のおくのほうに、二年間くらしたタンセンの町があり、マヤのおかあさんが、おもしろい病気のからだをやすめている、みすばらしい小屋があるのです。

マヤには、おとうさんもおかあさんもいます。

しかし、おとうさんのシュバナムは行商人で、町から町を、商売してあるかなければなりませんし、おかあさんのサラスワティは、おもしろい結核にかかっていました。

わたしたちは、この子をひきとってそだててきたのです。

「マヤのアマ（おかあさん）、おねがい。どうか生きて



いてやってちょうだい。マヤもわたしたちも、かならずかえってきます。」

わたしはおもわず、心のなかでそうつぶやき、マヤのかわいらしい手をとっていのるのでした。

おもいかえせば、もう二年になります。夫の岩村昇が派遣医師として、ヒマラヤの国ネパールへやってきたのは、きょう年のはじめのことでした。

結核やライなどという、おそろしい病気になるしむネパールの人びとをみてあげる毎日がつづきましました。よろこびも、くるしみも、ゆめのようにすぎました。いろいろなことがつぎつぎにおこった、はげしい仕事でした。

いま、わたしたちは、ひとまず仕事をおえて、なつかしい日本へかえるところなのです。

ゆれる人力車じんりきしやのなかで、わたしたちはさまざまなおもいでいっぱいでした。そして、わたしのうでのなかには、満三才まんさいになるかならないかのネパールの女の子おんなこがだかれています。マヤ＝デビー。ひとみの大きな、かわいい子こです。この年としの子こにしてはからだこそ小さいけれど、とても元気げんきです。

でも、わたしがはじめてこの子こをうでにだいたときには、やせこけていて、まるでミイラのような、結核けっかくにおかされていた赤んぼうあかうでした。

それが病氣びようきもよくなって、こんなにしっかりした子こどもになりました。

そしていま、マヤはわたしたちの子こどもとして、いっしょに日本にほんへむかうのです。



はじめてみた世界せかい

かえりの旅たびのなかでも、マヤはいろいろと心配しんぱいをかけました。

マヤは、世界の屋根やねといわれるヒマラヤのふもとにそだった子こどもです。文明ぶんめいにふれたことがまるでないのです。

ブートルの町にでたとたん、ベルをならしながら自転車じてんしゃがとおりました。

マヤは、目をまるくしてびっくりしました。

自転車じてんしゃをみたのは、はじめてだったのです。

バヤラワいきのバスがやってくると、マヤはおびえてしまいました。

マヤにとつては、いままでみたことのないこんな機械きかいは、まるで怪物かいぶつのようなものだったでしょう。のせようとしてもこわがって、わたしにだきついてくるのでした。

わたしたちをおくってきたマヤのバブ（おとうさん）は、なきわめいているマヤの手てをしっかりとにぎってやり、おちつかせてくれました。

わたしは、それをみながら、せつない気きもちがこみあげてくるのをかんじました。

じぶんの子どもこは、あたらしい、みしらぬ世界せかいへはいつていくのです。それをバブは、いま心こころにおもっているでしょう。じぶんはこの世界せかいにのこって、いっしょにすめない。でも、子どものことをおもって、いっしょうけんめい、みしらぬ世界せかいのほうへおしやっているのです。

これが、ふたつの世界せかいの国くにざかいでの、親おやと子このわかれでした。



カルカタでは、三宅さんという、しりあいのかたのおたくに一週間ほどとめていただきました。

日本の人たちがいっぱい、わたしたちはたのしく、クリスマス・イブもおくれたのですが、マヤは日本語がわからず、ふくれていました。

これから日本にいけば、マヤはますますたいへんなことにぶつかるでしょう。なにもかも、みんなあたらしいことなのですから。

日本で、わたしたちがおちつくさきは、鳥取県米子市の、夫の両親の家です。

マヤにとってはおじいちゃん、おばあちゃんにあたるおふたりが、マヤをやさしくむかえてくれるでしょうか？

マヤを気にいって、なかよしになってくれるでしょうか？

わたしたちは、そのことも心配でした。

マヤはすくすくとそだっています